

14) クサノオウ＝草黄／草王

クサノオウはケシ科の2年草で、北海道、本州、四国、九州の陽当たりの良い路傍に生え、東アジアの温帯地方に広く分布する。茎は高さ30～60cm、中はストロー状の中空で、長い白毛がある。葉は互生し1～2回奇数羽状複葉で、表は明るい緑色、裏面は白っぽく細かい毛で覆われている。関東地方の周辺では5月の連休の頃に、散形花序を出して花径3～5cmほどで、鮮やかな黄色の4弁花をつける。萼片は2枚で多数の雄蕊があり、雌蕊は1本、蒴果は細長く2裂する。和名の由来は葉が黄色の汁を出すからとも、丹毒(タンドク＝連鎖状球菌が傷口から入って粘膜や皮膚をおかす伝染病)を直すから、草＝瘡(クサ)の王様であるとする説などがある。別称としてはタムシグサを初めイボクサ、エボクサ、ツンボグサ、チドメグサ、ヤイトバナなどさまざま、アイヌではオトンプイキナ(肛門草)と呼んでいる。これらの呼称は、古くは「タムシ」の治療や「イボ」を取るために、はたまた「止血」や、アイヌでは「痔疾」の治療のために、用いられたことによるものと推察されるが定かではない。学名は『*Chelidonium majus*』で、属名はギリシャ語のツバメ(chéridon)に由来し、母ツバメがヒナ鳥の目をこの植物のサフラン色の汁で洗い視力を強める。という言い伝えによるもので、その命名者はアリストテレスであるといわれている。種小辞は「より大きい」という意味である。このためイギリスでの呼称も『Swallow wort』で、またフランスでは『chéridoine』、一方、中国では『白屈菜』(ハックツサイ)である。

クサノオウはヤマブキソウによく似ており、一見すると間違いそうになる。花の姿も、また開花時期もそっくりである。同じクサノオウ属の植物であるから、当然といえば当然であるのだが、花弁数も4枚で草全体の印象もよく似ている。ただヤマブキソウが比較的日陰の林間などに多く自生するのに対して、本種は陽当りを好むところから区別のヒントが得られる。決定的に異なるのは葉の形で、羽状複葉の切れ込みがヤマブキソウの方が顕著で深い。ただ鑑賞するという点では、どちらも鮮やかな黄色の花が美しく、甲乙つけがたい。種子にエライオソームが付く点も同様である。

貝原益軒が1709年に著わした『大和本草』によれば、「白屈菜(ハカリウ)＜中略＞其の茎葉を折れば黄汁いづ。味苦し。今俗に、草の王と云。よく瘡腫を消す。その葉をもみてつくる。妙薬也」と記されている。クサノオウは薬草としての価値がたいへん高く、黄色の汁の中には、『ケリドニウム・アルカロイド』を含んでおり、鎮静や鎮痛作用、それに知覚神経を麻痺させる作用があり、アヘンよりは弱いものの、アヘンの代用として用いられることも少なくなかった。このため漢方では全草を乾燥させたものを『白屈菜』(ハックツサイ)と称して、鎮痛、鎮痙薬として用いられている。以前にはこの植物を胃ガンの治療のために用いられたこともあったが、やがて痛み止め程度で、胃ガンの根本的な治療には役に立たないことが判明し、現在では行なわれていない。



クサノオウの花、ケシ科の植物で、ヤマブキソウに似ている(長野県安曇野市)。



鮮やかな黄色が美しいクサノオウの花。どこにでも普通に見られた花であったが、最近ではめっきり少なくなってきた。ヤマブキソウ同様アリ散布植物である(埼玉県児玉町)。



クサノオウの花は陽当たりを好み、道路わきや林縁などに生える(埼玉県児玉町)。



つい数年前までは単なる雑草に過ぎなかったが、最近ではこの花を路傍で見ることがほとんどなくなりました。花が美しいために邸内へ持ち込まれたのだろう(文京区小石川植物園)。



しかし小石川植物園では名札はなく、雑草扱いだった。喜ぶべきか、悲しむべきか？

[目次に戻る](#)